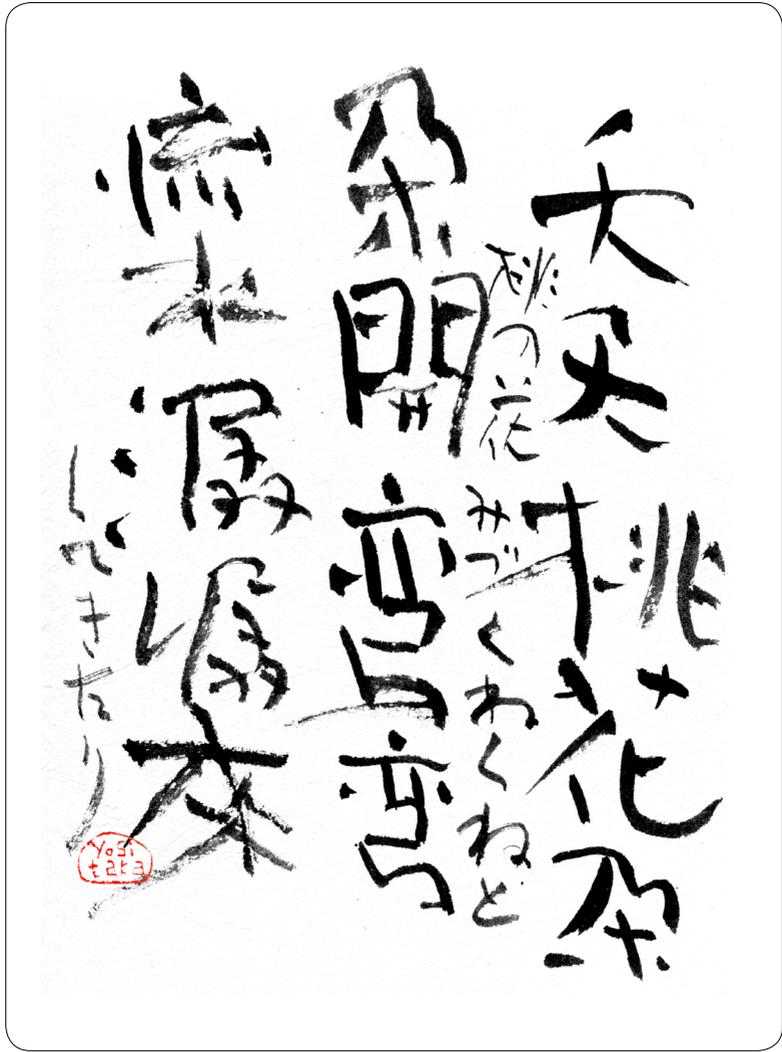


あを

3

2012





桃の花水くねくねとしてきたり

天天桃花朵朵開

弯弯流水潺潺來 (王岩記)

あそ

三 月

假 廬 佐藤喜孝

ずずご玉こころあたりには假廬を

熟柿のこれからさきは形而上

くちびるがおもひだしたる風花を

階段でちよつと手をだす竈猫

穴よりも大きな穴の障子かな

ポイントセチア遺作で埋るわが句帳

美作に對ひて冬の夜の電話



前号の『三上』の続きめくが、よく風呂場に本を持ちこむ。湯舟でちつとしてゐるのが苦手である。川崎展宏先生の『俳句初心』を湯舟につかりながら読んでゐた。何日かかけ花鳥諷詠の話など読み進み、「浪もてゆへる」といふ随筆を読んでゐた。〈稲つまや浪もてゆへる秋津島〉が目飛び込んできた。蕪村の句である。私も似たやうな句を作つたなあと調べると、〈日の本は白浪もて縁どれり〉といふ句であった。前にも〈大寒やほこりのごとくありにけり〉を「青写真」を出したあとに〈大寒の埃の如く人死ぬる 虚子〉を知り愕き恥じた。『稲つま』は神と思へるくらい明るく重く句を生動させてゐるのに比し拙句には生氣がない。随筆は次の句で結ばれてゐた。

桜貝大和島根のあるかぎり 展宏

年 始 長崎桂子

初漁に恵比寿顔なり港衆

初糶や童顔の男もどかしげ

湾近く裸木二・三逞しき

遊覧船初春の海ほぐれをり

七草を食べて労る朝かな

仄暗き葬りの帰り寒の星

硝子戸の鳴る風吹くや日脚伸ぶ



早崎泰江

百歳の叔母の賀状を楽しめり

にぎやかに初日つえばむ雀どち

初鏡思はず背筋のぼしをり

冬麗や雲探せども見当らぬ

眼がねして冬芽のふくらみ確かめる

枝の揺れ映せし甕の氷かな

朝な夕な窓の富士見て冬籠



年末売出しの景品に貰ったパンジーが蕾を三つ四つ付けてきてくれて、寒さにもめげず、強く頼もしいのでなんとなく嬉しい気持。

西の鈴鹿山脈は、頂上からすっぱり雪を纏い、よく晴れた日にはとても美しい姿を見せてくれる。

暮の二十六日に目覚めたり、五糶ほどの積雪で、終日どんどん降った一日でした。明けて又五日には数糶の積雪で、近年に無い寒さの年始ゆえに、つい、外出をためらってしまっているので、運動不足は十分に自覚があるから、時々是自己流の体操をして補っている。

怠けに慣れた体を常の暮しに戻すには、明日から、力まずに心して、朝起をしようと小さい計をたてた。

福 島 堀内 一 郎

福島が目の前にある寒さかな

何となく正月が過ぎフランスパン

雪のある頁が欲しく母を呼ぶ

東京初雪少年の目になりてこそ

一分の黙禱ながし春の雪

譬へれば転がつてゆく寒たまご

ハモニカは欲求不満冬の果

鴨 森 理 和

お年玉女将手書の飛竜絵馬

洋館の小さき窓越し春の海

春光や洋館の窓射貫きをり

家々の影の燃え立つ寒夕焼

けふもけふ星形に障子繕へり

鹿兒島の蚕豆けふは値引棚

陰になり鴨はよちよち水に入る



喪中の年明けを過した。先妣は十二月三十一日の最後に田作を作った火鉢の頃は今でこまめ鱒を炒った。フライパンに平たく並べ丁寧に炒り、広げた新聞紙に移す。洋風のスープ入れに山盛に作ったので、この作業は一時間程繰り返された。飲兵衛の大家族には最高の肴。三日ともたなかった。最近では電子レンジでチン。今でも私は見ていた様に作る。プラスチック製の行李二つと青い琺瑯の糠床容器が私の嫁入り道具。祖母、母、私と百年を越す糠床。統計学で算術すると基の糠は無くなるらしい。が、この糠漬が七座句会で役立つ様になった。「あを」一月号のあとがきに記していたのだ。私と七座句会との太いパイプ役を果していた。受け継いだこの二品の先行きは霧の中。



山莊慶子

故郷の冬懐かしく淋しくも
幼にも駆け引きのあり冬林檎
垣の外蜜柑ぽとりと午後の町
小春日やわが前をゆく試歩の夫
ビニール片冬の蝶かと思ひけり
冬の日やしかと蓄の脹らめり
日脚伸ぶ姿麗し四天王

北 陸 吉成美代子

松明をたいて空港大吹雪
雪折れも聞えて暗き露天風呂
どの店も落雪注意貼紙あり
武家屋敷連なる土塀雪囲
一瞬に医王雪嶺浮び出る
薄らと雪被る松吊られぬる
繰り返す着陸態勢雪しまく

何気なくテレビをつけると見覚えのある風景が目にとびこんできた。自宅「近くの風景である。「ちい散歩」という番組。いつも夫と散歩の途中坐る遊歩道のベンチに地井さんが坐っていて「この街に来て最も感動したのはこの広い空です」と語っていた。

中川の土手の手前には特産小松菜の緑の畑が続き対岸には街並が遥かに広がり、川岸には白鷺も。

地理的には東京の近くに位置しながら開発が遅れ、地方都市を感じさせる街は不便なことも多いが、この広い空がそれらを忘れさせてくれる。この地に住む私も、どこまでも限りなく続く青く広い空が大好きです。





吉弘恭子

河馬鳴いて野良猫走る雨夜の月
子の尻をひつくりかえして日向ぼこ
あらしひのごとくあらしふ落葉かな
木枯にむかふ鼻筋とほらぬ子
夕焼のうしろにまはる冬の影
こぼれ落つすずめの群れから寒雀
子に貸してやりたやポマード大旦

初芝居

赤座典子

自然も人も穏やかであれ冬桜
大寒に真夏の国のテニス追ふ
一人居の地震は怖し室の花
DVDの見方教る雪催
横町の雪しぶとかり氷面鏡
冬菫百四歳の訃に接す
初芝居笑ひ涙の小劇場

歳のことをいうと笑われてしまっ
が七〇年も生きていろいろあ
りすぎていることに改めて驚いて
いる。昨年の自然災害に加え人間の傲
慢さの現れて起きた事故。まだ記憶
に新しい「今後一〇〇年は安心」と
年金事業を宣った前政党的厚生大
臣、言ったこと起きた事など責任は
どうなるのだろうか。開戦に始つて
(一九四一年生れ) 今日までの七十
年と三ヶ月、上枝下枝に積つた雪が
いつまでも綺麗に見えるようにとつ
い思っているところです。

わかぎあふ

インターネットによると、肩書は
女優 演出家 劇作家 エッセイス
トとある。公演には三度見に行つた
だけだが、とにかく面白い。多才な
人である。小柄な美人でも五十
代には見えない。そして大阪出身。
大阪の人って生れた時から可笑し
い。笑いが何よりも優先するらしい。
今回の芝居は、人見絹枝さんに捧
げて書かれた「体育の時間」。
荒唐無稽な配役展開に呆気にとら
れ、爆笑しているうちに、その内容
がひたむきに演じる人を通して伝
わってくる。
そしてカーテンコールでの「元氣
を届けたくて書いた」等々の彼女の
言葉に又泣き笑い。これからも幸せ
な気持になれる下北沢へ行くだろ
う。



遠藤実

羽音して朝日を散らす初雀

いまだまだ記念日忘れぬ雪割草

この意固地長生の葉冬怒濤

猫の耳動きて春の影動き

花街の冬日に干されし透明傘

熱爛や話のすぢが又戻り

北狐人が騙して園の檻



大日向幸江

ていねいに百八の鐘ききをへし

初筑波絶えて久しき織の音

深雪晴旅運大吉飛行雲

裸木に子育始む鴉の巢

寒晴の棒高跳は背より落つ

近頃ふと思ふ事がある。なにか淋しくて無常観がある。何だろうなと思つて外を歩いていて、ああこれだと気が付いた事がある。それは街に土が見えないのだ。冬なのに霜柱がないのだ。道はアスファルトかセメントで舗装された。よくまあ土を隠したものだと感じる。母なる大地に生まれ、万物は最後には大地に帰ると云われて居る。と云う事は人間として、自分の帰るところが無いと云う事なのか。自分としてまあ歳を取った考え方をするようになったと思ふ今頃である。



捲き戻しきかぬ人生除夜の鐘

初湯まづ「道後の温泉」の香口開く

箱根駅伝今年限りの神の足

あの人は今パリからの年賀状

七草粥もって奢りのメとする

御歌会始拝聴テレビの前

猫のみた頃なつかしむ寒い日日

猿廻し 篠田純子

輪を少し下げ手ごころ猿廻し

をさな児の愛想わらひに初笑

人間の分際を知る去年今年

新暦また厄介な闘志湧く

はつ御空東京タワーの方が好き

昇降機落葉を挟み下り来たり

ねぎらはれほどけゆくもの春の雪

国道一号線を東京方面に走るバスの窓外に見た光景。

大ぶりの作業用の手袋が植木鉢の添え木に人差指の部分を通して干してあった。

手袋を干す時大方は手首の部分を挟んで干すと思う。指を挟むとしたらバランス上中指を挟む。

人差指を真っ直ぐ真上に向けて差す動作は余り見かけない。

駅員さんの指差しは水平。

誕生佛は五本の指で天上を差し。

ガレの「手」は中指を中心に三本の指を立てている。

そんなことをあれこれ考えていたら一句浮んだ。

手袋の人差指を立てて干す

昨年の三月の震災のあと、日々のテレビの映像は恐ろしいものばかりで見るのもつらかった。夏頃新型の iPod が売り出されたので購入した。

あれから半年。まだまだ使いこなせてはいないが手元に置いて楽しんでる。分らない語彙や事柄はすぐインターネットで検索。「ど忘れ」もたちまちのうちに解消してくれる。

今、「ラ・カンパネラ」に夢中になっている。youtube でフジコヘミングを見る。次は辻井伸行。次は私の番で Finger Piano でレッスんだ。ラ・カンパネラの難易度は五段階の「二」。主に右手の人さし指で行う。

メロディと速度は白鍵は青色で黒鍵は緑色で表示され、なぞるようによろよう弾く。三回位弾き終える頃、私はすっかりフジコヘミングになり切っている。

奴 風 定梶じょう

年の内煮豆に芯のあることも
ポンプ小屋鉄扉に施錠輪飾りし
天井のいつもの木目初明り
読みさしの栞ここより読始め
煮凝に目玉なきこと恐れけり
鬼瓦目を剥く天に奴風
凍光や聞えてものの割るる音

◆ 芝 尚子

めったにはなかない猫と日向ぼこ
初夢や杖をかついで駆けてゐる
餅一つなだめ切れずにお正月
つく杖の力も寒に入りけり
寒さふりほどきてもふり解きても

十二月号あとがきで喜孝代表は、
かな遣いを原稿どおりにすることを
宣していらつしやる。

俳諧は文語を使っていたわけだ
が、口語を用いて句作している人も
勿論あった。鄙俗滑稽を旨とするよ
うになり、必然口語を使わざるを得
なかった。当然歴史的仮名遣い。終
戦まではその新旧を区別する苦勞は
なかった。

そして現代。句歌を作るに、口語
遣いであって新仮名を送るのは百
パーセント納得できるが、文語をつ
かしながら現代仮名を送ること、文
金島田にウエディング・ドレスをま
とった花よめを見るようで、気恥か
しい。



聖誕祭

芝宮須磨子

過ぎし日をなつかしく思ふ出初式
いみじくも干支に似た雲冬の朝
初雪や此の時が大事と人が云ふ
日面の南天めでて裏木戸へ
友の日日おぼつかなくて寒きびし
出初式鳶の世代も様変り
足元を気にして出づる雪の朝



須賀敏子

寒天に月細く細くありにけり
獅子の舞長屋門より生まれり
スカイツリー見えし街にて福詣
去りし年語り継ぐこと多かりし
蠟梅は彼方ですよと手を翳す
房総の陽のあつまりて水仙花
夜の雪メール届かぬ子を待てり



富山とよだ(349.5m)

一月十八日千葉の富山へハイキングをした。目的の水仙は見頃になっていた。山の南面に数箇所水仙の群落があり、良い香りが満ちていた。登山道にも所々に水仙が咲いていた。双耳峰の北峰からの眺望は素晴らしく、展望台も設けられている。

この日は晴天無風だったので霞がかり、富士山を望むことは出来なかったが、房総の山々と東京湾を堪能した。下山の途中には宝井馬琴の小説『南総里見八犬伝』の発祥の地と伝えられる伏姫の籠屋があり、立派な観光施設になっている。

JR内房線岩井駅より四時間弱で周遊できる。登山道は整備され危険箇所もなく、お勤めのハイキングコースである。



竹内弘子

回遊魚めまぐるしくて涼しかり
キッチンの指さし点検いなびかり
畳に足まげて木の実をこぼしける
細引に括りし小枝芽吹きそむ
聖餐のごと一椀の風邪の粥
春寒し帯地のごとき曼荼羅図
下校児のばらばら走る昼の火事

ポルカ 田中藤穂

どん底とおもふ安らぎ冬至粥
花溢れニューイヤークンサートはポルカ
西の空茜となりぬ賀状書く
松過ぎぬさあカレーでも煮ませうか
松過ぎの小店を覗く花川戸
花魁の下駄重たかり雪催ひ
綿虫や世になきものを恋ひわたる

その日、朝から起った事を順に思い出すと、自宅508から1階のポストまで新聞ほか郵便物を取りに下りた。いつものように通勤通学の早い人とのあいさつを交しながら新聞を抱え508号に戻るべくエレベーターに乗るとすぐ電気が止って真暗になった。以前にもこんな事があったので、じっとして通電を待った。30分にもそれ以上にも思え、連合いが案じているだろうと思った。やっと動き出したので、一階のカウンターへ行って係の人に言わなければと思った。ロビーに下りる三段ほどの傾斜で足をこらせて転倒し、一時的に失神し、気が付いた時は、508の自分のベットで寝かされていたのである。新聞を取りに行つて戻らないのでつれあいが外へ出て参道を行き来して探したらしい。気の毒なことをしてしまった。

地下鉄浅草駅から二天門の方へ裏道を行つたら、半間程のショーウィンドウに献上博多の帯地で作つたハンドバッグや素敵な草履、裾広がりの大きな花魁の下駄が飾つてある。友達と足を止めて見ていたら中から男の人が出てきて、ウインドーを開けて花魁の下駄を出してくれた。重い。花魁の衣装髪飾の重さを受けとめるだけのしつかりしたものでなければならぬのだぞうだ。黒い木の台に細かな蘭草の表で鼻緒は黒。これが関西にゆくと紅なのだぞうだ。やはり関東は粋、関西は艶というところか。通りすがの私達に気持よくいふんな話をしてくれた花川戸の小店の御主人、今日は小正月の浅草へ来て福を沢山授かった。とても楽しい一日でした。



續木文子

日向ぼこ五体満足百二才

蓬萊や峰より龍の光有り

白雲やD51走る御伽の国

デロイチ

初富士や映像仰ぎ龍の年

梟は目玉に映る月を見る



二月作品より

佐藤喜孝

月蝕のよく見え寒気全身に

田中藤穂

臘月は人想ふ月掌を重ね

あの夜は快晴ゆゑに寒かった。私も短時間だが欠けてゆく月を見に出た。藤穂さんも惹かれる何物か
が
あり
に
な
ら
れ
た
や
う
だ。
「全身に」は月との関
は
り
を
密
に
し
て
ゐ
る。

静かな句である。

「臘月」は陰曆十二月のことである。今年で云へば一月が旧曆の十二月と大方かさなる。旧曆月の呼名をだう読むか迷ふことがある。詩は学問ではないので、ここは新曆十二月の異称と読む。この十二月を「臘月」と云ふことにより静かさを増す。月を繰返すことにより思ひの沈潜した句になる。「掌を重ね」で眼前に來し方を回頭してゐる人の像が浮んできた。

掌をそでと読ますのは抵抗がある。ここは「手」で充分に伝はる。

紙風船孫への土産十二月

優しい心根の句である。それには「十二月」は事実であるだらうがふさはしくない。「紙風船」を季語としてもよい。一般に「孫」「老」を句中に用ゐるのは難易度が高いといはれてゐる。掲句も同じことが云へる。孫も子供、事実は置いておいてこは「子」で十分である。亡き父母を「考妣」といふ漢字を使ふ例が増えてきた。これも大半は父母で済む句が多いとおもふ。鎌倉喜久恵さんにこのことを調べた文章がある。機会をみつけ再録したい。

山茶花の散りし花びらたのしみぬ

早崎泰江

花でも木の葉でも散ると直ぐに塵芥扱にする人がある。父の師匠（表具師だが親方が似合わない人

ので)も、庭に散った木の葉は、一枚づつ拾はれてゐた。先日伺った寺の住職も同じ性格と見える。こちらは一般家庭の庭とは違ひ広大なので手で拾つてゐられぬ、とばかりに大きな送風機で一カ所に吹寄せてゐた。竹箒などで掃く音は風情があつてよいが送風機には驚いた。実際たずさはつたことがないので苦労は分らぬがお寺さんならなほさら淋しい気がした。掲句の作者は少し心にゆとりがあるやうだ。咲いてゐる山茶花はもちろん毎日の楽しみであらうが、垣根や根方に散り敷いた山茶花の花びらも捨て難い美しさがある。作者は身辺の自然の移り変わりを愉しんでをられる。氷がはつたかと甕を覗き、冬枯の道を歩いてゐても岸田劉生の絵を思ふ。それを十七字に自然体でまとめられる。このやうな境地になれるまで私にはもう少し時間が掛りさうだ。

落葉風左旋回国病める

堀内 一郎

作者が選んだ言葉はいつも重層制を帯びてゐる。(?)裏があるといった方が正しいかも知れない。

最近ではセリフも覚えてきた。この寒い冬の夜障子、硝子戸、網戸と開け「まっくろくろすけでおいで、出ない」とく」大声を上げる。近所迷惑と家内迷惑。二、三度繰返す儀式が終るとやっと窓を閉めてくれる。

侘助や夫の靴見え床屋さん

森 理和

明るく楽しいこのやうな句は読み手も頬がゆるむ。理髪店ではなく床屋さんいふところが句意になふ。行きつけの床屋さんであらう。店は足元だけが透けて見えるつくりなのであらう。外から目ざとく夫の靴と見分けた妻の眼力もすごい。かういふ愛情表現は日本人好みかも知れぬ。点景の侘助も年を重ねた夫婦にふさはしい。

笑みつくるモナリザに似てラ・フランス 大日向幸江

ラ・フランスはフランスさんの洋梨である。本国はじめヨーロッパでは気候が合はずほとんど生産されてゐないさうだ。日本へは食用ではなく一九〇三

“左旋回”も“国病める”と続けば一目瞭然、イデオロギーの右左を想起する。左旋回してゐるかどうかはわからぬが、国民の大多数は国政を案じてゐるのは確かだ。落葉風が寒々しい。私には右旋回してゐるやうに見えるのだが。

ハーモニカ真つ黒黒に吊し柿

森 理和

ハーモニカに吊し柿、これだけで懐かしい世界である。作者は黒い(珍しい)吊し柿を眼前にしてその干し柿が作られる田園風景を目に浮べてゐるのかも知れない。さうでなくとも干柿と云ふ気どらぬお菓子は子供の頃からの馴染みである。近年知合つたモンブランやシフォンケーキとは違ふ。年季が入つてゐる。ハーモニカが奏でる曲はあかとんぼかふるさどであらう。

余談だが、二歳半の子供は、宮崎駿のアニメが大好きである。毎日DVDを見てゐる。はじめてみたのは『となりのトトロ』次は『千と千尋の神隠し』『崖の上のポニョ』これを飽きもせず繰返し見る。

年入つてきたといふ。円形ではなく、下ぶくれでゴツゴツした形は絵心をさそふ。ダ・ヴィンチのモナリザは今フランスの美術館にある。

掲句、この二つが似てゐるといふ。どの辺りがどのやうに似てゐるのであらうか。似てゐるといへればさうかとも思ふが……。しかしこの句にこのやうな詮索は無用。ふとさう思へば動かし難い。“モナリザのほほえみ”ではなく“笑みつくるモナリザ”に作者の神経が細かく働いてゐる。読者もフランスを前にした時、掲句を思ひ浮べてみて下さい。きつとモナリザのやうな笑みをするかもしれませぬ。

風の中なほ触れ合はぬ吾亦紅

鎌倉喜久恵

はからずも絶筆になつてしまった。写生句として見事。吾亦紅の咲いてゐる開けた光景をかげが渡つてゆくさまが私には浮ぶ。吾亦紅は群落といへど密集はしてゐない。“なほ触れ合はぬ”といへば所思を述べてゐるともとれる。さう受け止めて読むこと

が可能な作品である。喜久恵さんはさう思へる人であった。

二度二度出て月蝕に手をあはせ

この度の皆既月食はなぜか『あを』の会員は関心があったやうだ。かくいふ私も妻の拘りには負けるが促されて二度ほど道に出た。隣家の人も出てこられひそひそ声で会話をした。手は合はさなかつたが作者は合はず心境になった（心境になつてゐた）のだらう。常に見てゐる月の色とは違ふあの日の月色には靈力が籠つてゐるやうに思へた。『二度二度』に作者の思ひがひしひしと伝はる。

冬麗のわが道をわが歩幅にて

最晩年の心境を余すところなく述べてをられる。『冬麗』といふ季語が読者をほっとさせるともそのやうなお顔をなされてゐた。この句を発句にして脇起しで連句を作らうと思ふ。有志の方私までお声を掛けて下さい。

冬空の底の青さを仰ぎ見る

木村茂登子

独創的な視点である。冬晴の空は他の季節と違ひ透明感がある。今見てゐる作者の位置を空の底といふ。それを見てゐるもう一人の作者は天上、宇宙からの視点。身体は年をとつても脳は年をとらないといふ証左。

信号でASIMOの走りそぞろ寒

篠田純子

信号でアシモ走りをしたのは誰であらうか。ロボットのアシモ君(?)の走る時は腰を落し、膝を曲げて走るやうに見える。ジャンプもする。

横断歩道を渡りきらぬうち信号が変る時がままある。信号が橙や赤に変られ慌てて走る。その様子がアシモ君のやうだとちよつと年とつた自分を振り返る。まさに『そぞろ寒』である。

電子音同時に鳴りぬ日の短

芝宮須磨子

いまごろの電化製品はよく音で知らせてくれる。テレビドラマの中のこの種の音に反応してしまふことある。なさない。部屋の中にその家電から報せが同時に鳴つた。せはしない。家電に使はれてゐるやうだ。『日の短』が一日の慌ただしさをコミカルにそしてちよつとシニカルに描かれてゐる。

句帳焼く焚火にあらね手をかざし

定梶しよう

心騒ぐ句である。なぜ句帳を焼くのだらうか。その燃やす句帳から立つ炎に暖をとるではなく手をかざす作者。

私の場合は俳句総合誌の附録で済まず。悪筆なので拾はれても他の人には読めぬから困らぬが。手帳からノートへ写すとまう用なし、ゴミ箱へ。掲句の手帳は私の使ひ方ではない句帳のやうだ。もしかしたら遺品かも知れない。『手をかざし』に屈折した心の陰翳がみえてくる。

渋柿の渋をぬかれた据りやう

芝宮須磨子

渋柿が渋を抜かれたら渋柿ではなくなる。渋柿が腑抜けになつたやうで可笑しい。『据りやう』が渋柿の困つたやうな顔が浮ぶ。可笑しくちよつとさびしい。須磨子さんの家人に落語家の真打がをられる。枕に使へさうな俳諧味のある句である。

胎児のこゑ耳にとどめて秋風と

吉弘恭子

追悼句は評の対象に不向きなやうだ。この句はこのままでは省略が効き過ぎ句意が誤解されるかも知れぬ。病床にある人の娘が初めて身ごもつた。産み月までまだ間があるが、秋風とともに天に召された。きつとおなかの子と会話をして逝かれたのだと慮つた作者の追悼の念ひであらう。

東京秋晴北海道まで見えるやう

佐藤喜孝

臘月は人想ふ月掌を重ね

田中藤穂

障子貼るああ一年と一人言

長崎桂子

山茶花の散りし花びらたのしみぬ

早崎泰江

落葉風左旋回国病める

堀内一郎

佗助や夫の靴見え床屋さん

森理和

老いどちの声掛け合ひて冬の朝

山莊慶子

冬暖か定休の文字うつくしく

吉成美代子

日向ぼこ猫の寝息に合はせぬ

吉弘恭子

冬鴉どんと着地すトタン屋根

赤座典子

佗助や効能書きをしみじみと

遠藤実

笑みつくるモナリザに似てラ・フランス

大日向幸江

冬晴や丹沢山系指呼の間に

木村茂登子

信号でASIMOの走りそぞろ寒

篠田純子

句帳焼く焚火にあらね手をかざし

定梶じょう

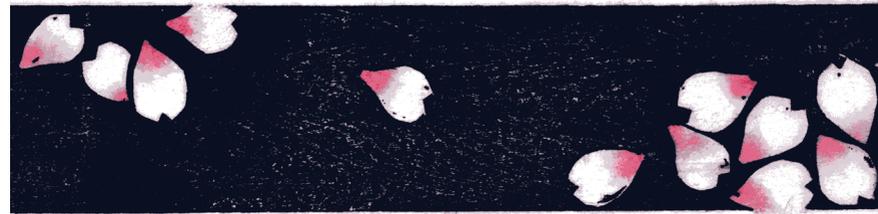
渋柿の渋をぬかれた据りやう

芝宮須磨子

プールにて大きく歩く冬至の日

須賀敏子

喜孝抄



壬子の冬一子を生り荘子が大鵬の詞をかり南溟（冥）溟に遊はん事を祝

鳶の子よ九万里翥で雪の空

巴水

巴水、藤井氏。号は巴水。生没年未詳。江戸時代前期の俳人。加賀に生まれ、元禄六年（1693）大阪に路通を、湖南に木節を訪ねるなど、蕉門の人々と交流があった。著作に『薦獅子集』（元禄六）がある。この句は『嵐雪廿七周忌追善集』（史登編）に出典し、前書と句の表現から、巴水が『莊子』「逍遙遊編」を踏まえて詠んだものと分かる。

北の冥に魚あり。其の名を鯤と為う。鯤の大きさ、其の幾千里なるを知らず。化して鳥と為るとき、

其の名を鵬と為う。鵬の背、其の幾千里なるを知らず。怒ちて飛べば、其の翼は天垂つ雲の若し。是の鳥は、海の運くとき、將に南の冥に徙らんとす。南の冥とは、天のなせる池なり。

齊諧とは怪を志れる者なり。諧の言に曰う、「鵬の南の冥に徙るとき、水に撃つこと三千里、扶搖に搏きて上ること九万里、去るに六月の息を以てする者なり。」と。

北方の暗い大海にいる魚は鯤と云い、大鳥と化し鵬になる。この想像上の大鳥は背中の大きさが何千里あるか分からず、辻風を起こして九万里の上空に飛びあがって行くという。「鵬程万里」という中国語の成語はここに出典し、そのままに日本語としても使われている。「洋々たる前途、限りなき前途」を意味している。巴水の句は正に翼を広げて高く飛ぶ鯤鵬を以て、新生児の洋々たる前途を祝うものである。「鳶が鷹を生む」という諺はあるが、鷹になれというどころか、鳶の子よ、お前はあの九万里の上空に飛びあがり、南の果ての海（天の池）へと天翔る鯤鵬になれと巴水は望んでいる。

江戸時代に老荘思想が流行していた。それに関する出版物は汗牛充棟だと言つていいほどである。例えば、『田中荘子』（佚斎樗山著 享保12年刊）、『田中荘子外篇』（佚斎樗山著 享保12年刊）、『面影荘子』（田中友永著 寛保3年刊）、『浮世荘子』（雪翁著 明和4年刊）、『夢中老子』（燕志堂著 延享4年刊）、『都老子』（名張湖鏡著 宝暦2年刊）、『老子形気』（新井白蛾著 宝暦4年刊）などが挙げられる。

どんど

長崎桂子

少女の日どんどどんどと跳ねてゐし

どんど飾る稲藁被す松竹に

どんどに火付ける付けない老と若

竹弾け藁の火の粉やどんど燃ゆ

暗闇にどんど火の粉鮫小紋

どんど燃ゆ喚声拍手幼泣く

どんどの火遠巻きにしてぬくぬくし

病なし願ひ五體にどんどの火

青竹は火吹きに変わるどんどかな

涙してどんど残り火餅を焼く

祖父は酒皆は小豆のどんどの夜

あを創刊十周年記念句集を読む

『安房』 鈴木多枝子

吉弘恭子

手をのべし落葉の中の紅ひと葉

公園などでは落葉が敷詰められていて子供が楽しそうに走り廻っておとを楽しんでいたりと、舞いあがる葉の中に身をなげだして声をあげて遊んでいる姿を見かける。大人になるとそこまでは出来ないが気持はある。羨ましい！

多枝子さんは落葉の中に赤い葉をみつけた。もみじであろうかそれとも桜であろうか。さくら紅葉も綺麗だ、つい手がのびてしまう。持ち帰って葉にしたかもしれない。心持は句の上に表現されていないが、十二分に伝わってくる。上五の手を述べしのや

さしい表現がいい。

紫雲英田は小さな町に変わりたり

小さい頃、花で冠を作ったり、ネックレスを作ったままごとで遊びました。久し振りで故郷に帰ったら作者は、紫雲英田があとかたもなく住宅が建並んでいた。遊んだ頃の記憶が脳裏を駆巡ったことだろう。こころねはを想像するときと淋しかったのだろうと思ってしまった。前に住んでいたところが偶然通った時全く違う景にびっくりしたことがあった。あまりに違うのにはやっぱり寂しさを感じてしまう。

母いつも何か煮てゐる梅雨ごもり

母親を思い出す時台所の姿が一番多い。多枝子さんもそのようだ。台所からいい匂いがただよってくると今何を煮ているのか想像するのも楽しいもの

だ。まして梅雨の頃外出を控えている時は尚更。この句を読んで料理が得意だった母を思い出した。いい思い出は心を和ませてくれる。

丸くなり本を読む父冬そうび

おとうさんの句を読んだのは何句かある。その中で後ろ姿の父親を呼んだこの句が印象深かった。面と向うと父親は怖い存在の様に思う。しかし後ろ姿は若い時と違って背中も丸くなってしまった。その背をなおも丸くして本を読まれていらっしやるお父さん。愛おしく思われているのがひしと伝わってくる。

故郷は雪降る気配骨納

表札に夫の名残し二度の秋

いくたびも終のさよなら野菊咲く

三句とも亡くなられた御主人を読まれたもの。イタリアに住われていらしたお嬢様ご夫妻も看病のため東京に居を移された。三句目、千葉にお墓があるのでなかなか行くことが間遠になる。骨納めの時の気持がひしひしと伝わってくる。

後ろ髪引かれる思いでさよならを言われたことだろう。季語の野菊がいい。野菊が咲誇るなかで二人で楽しまれている様に思う。ご冥福をお祈り致します。

豆を撒くだんだん声を大きくす

この頃豆まきをする声が進まない。若い世代になると豆まきをやらなくやるのだろうか。豆を撒くのはいつも父の役目である。戸を開け放ち、隣近所に聞える様にやったものだ。豆まきが終わってから夕食になる。多枝子さんの家では御主人がまいたのであるのか。最初は隣近所を憚って小さな声で撒きはじ

めたが、だんだん撒くことだけに集中してきた。当然声も大きくなる。昔からの庶民の習慣は大事にしたい。年の数だけ食べると親から教えられたがいつの頃からか私は、十分の一で勘弁してもらっている。

表具屋の上り框の夏座蒲団

表具師の糊ゆるめある桜もち

二句とも我が家を読んでいただいたようだ。建替える前の家は、三和土から家にあがるのに一尺強あった。お客様用に椅子は置いてなく座布団を置いていた。お使いからの帰り道、いつも寄っていたいた。二句目の糊を薄めているところを見ていたんだなあと感心した。世間話をしていても、季語の桜餅絶妙な季語である。古い家も狭いながらもよかったなあといい出させずにはいられなかった。ありがとう 多枝子さん。今だにお使いの帰りに窓か

吟行のご案内（神楽坂）

日時 四月十四日（土） 十一時

集合場所 善国寺（毘沙門天）

句会場（昼食）「暗闇坂宮下神楽」（12時～15時）

電話 6228-1985

申込〆切

四月十日

赤座典子まで



ら「多枝子さんご飯食べてるかな」と、つい見てしまふ癖が続いている。

一日は懐炉を背負ひはじまりぬ

車窓まで打ち寄せてみし麦の秋

石榴割れ般若の面に遠からず

野分過ぐ大きな月を置忘れ

梅雨じめり身の幅ほどの治療台

われひとり秋のドナウに手を濡らす

残る暑さ身を反らし見るピサの斜塔

西行のゆく先さきに滝があり

ふくれぬて落下してくる寒雀

豊満な牛の横断大夕立

逃腰で水をのむ猫石路の花

九十九里波静かなり春の鳶

列車今稽田を行く安房の国

毎月25日発売
定価900円(税込)

月刊俳句界 2012年4月号

春の夜やいやですだめですいけません
—エロスを詠む— (井伏鱒二)

◎エロスの俳句史
◎作品とエッセイ
鳥居真理子 佐々木六戈 他

特別作品 棚山波朗 徳田千鶴子
（ラビ） 俳句界NOW 鍵和田柚子

今、ブームの密教を詠む! ★特別吟行
★カララグラビア 空海のいる高野山
★エッセイ 山折哲雄 前田英樹
★密教を詠む!
黒田杏子 豊田都峰 伊藤通明 他
（毎月企画）おとなのエッセイ「方言」
伊那かつべい 小嵐九八郎 他

大正一〇〇年特別企画
忘れがたき珠玉の大正俳人
私の一冊 山咲一星 家セクシヲ結社「四葩」
魅惑の俳人 右城暮石

対談 佐高信の甘口でコンニチハ!
ゲスト **ねじめ正一** (作家)

※一部変更の可能性があります。

株式会社文学の森 | お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

あとがき

左は灘中の入試問題の中の二問です。

問 次の俳句の（ ）には同じ言葉が入ります。最も
も適当なものをア～カから選びなさい。

- () () の少女耳たぶより燃ゆる
() () の中に早出の月白し

ア 台風 イ 初雪 ウ 春雨 エ 名月 オ 夕立
カ 夕焼け

分りますよね。答は夕焼けです。私は台風も面白い
と思いました。問題が「適当なものを」ですが「適当
に」でしたら台風にしたかも知れません。

ある日(失念ゆゑ)朝日新聞より電話で『あを』
の中の二句が灘中の入試問題に使はれてゐます。回答
を新聞に載せるので著作権のご承諾をいただきたい。」

といはれた。東京本社からの電話であったが大版版の
当該紙を送っていたことにした。後日送られた新
聞の日付は二月三日であった。前句は後藤しづさん。
後句は松村美智子さんです。お一人は残念ですが連絡
できませんが、休作中の東亜未さんは喜んでをられま
した。こんな些細なことを切っ掛けにまた作句に戻っ
て下さることを祈念してゐます。(喜孝)

二〇一二年三月号

発行日 三月一日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-6908-6038

佐藤喜孝

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。